

日本の大学における 国際共修の取組とその展開： 実践例と学習成果のアセスメント



末松和子 教授
(東北大学高度教養教育・学生支援機構)
2017年6月18日

Table of Contents

1. 日本の国際共修の実践例
2. その中から見えてきた課題
 - ① 理論構築の必要性
 - ② 学習成果：ラーニング・アウトカム
 - ③ 教授法の確立
3. 学習成果のアセスメント

日本の国際共修の実践例

2015年：国内の大学を対象とした事例研究→事例集

- ◎授業名 ◎対象者・人数 ◎実施場所
- ◎開講形態 ◎使用言語 ◎単位付与
- ◎教材 ◎課題 ◎評価方法
- ◎授業実践の留意点 ◎実践における課題・対策

事例総数：36（国立：32 公立：1 私立：3）

日本の国際共修の実践例

		国公立	私立
単位付与	有	33	2
	無	0	1
指導言語	日本語	15	0
	英語	11	0
	多言語	7	3
実施場所	教室	16	2
	教室外・学外	1	0
	両方	16	1

日本の国際共修の実践例

<東北大学>

国際共修：

言語や文化の異なる学生同士が、授業内で他者への理解を深めながら己を見つめなおし、新しい価値観を創造する学習体験

- 文化背景の異なる学習者を対象とした授業設計
- 意味ある交流 (Meaningful Interaction) を効果的に取り入れる

全学教育科目 <カレントトピックス：2単位> 異文化間コミュニケーションを通じて世界を知ろう

授業の目的

世界で起こっている社会問題をテーマに、言語・文化背景の異なる学生が多角的な視点で議論を行い、相互理解を深め柔軟な思考力を身につけながら新しい価値観を創造する機会に触れる。

- 実施場所：教室
- 使用言語：日本語
- 受講者：国内・留学生各20～25名
- 正規生以外の留学生は日本語の授業として受講



授業設計：発展的に展開

授業の
目標
+
個人の
目標

受動的ディスカッション

能動的ディスカッション、プレゼンテーション

能動的ディスカッション、プレゼンテーション＜応用編＞

課題

- ① 毎回予習（テーマ学習）
- ② プレゼン2回（グループ）
- ③ レポート3回（個人）



国内学生のレポートより

学習目標の達成度、授業を振り返り、グループ、個人が直面した課題やその対策について分析

職場・アルバイト先で不適切な写真を撮りSNSに投稿する行為について

●日本人とはバイトテロは良くない、という意見で一致したが、留学生はそんなことは大したことではなくてバレなければいい、日本は厳しすぎるという意見で大きく捉え方が違ったのでとても驚いたと同時に、その相違の背景には文化の違いがあると感じとても興味深いと思った。自分で設定した「異なる価値観にも寛容に」という目標をある程度達成できた。

女性の社会進出について

●今までずっと日本に住んでいたことと、母が専業主婦であることから、男が働き、女が家を守るという図式はどこか当たり前のことのように感じていた。しかし、授業で話した留学生ほぼ全員に「うちの国ではそんな図式はない」と言われて初めて自分が固定観念にとらわれていることに気付いた。
（中略）働くことも家庭を持つことも、女性にとっての尊い権利であるので、どちらも両立できる社会の実現を強く希望する。

国内学生のレポートより

原子力発電について

●留学生と話していて、自分がいかに日本について無知であるか、を思い知った。話し合いの中で何度も東日本大震災のことを聞かれました。自分は被災地、福島出身なのに、復興の状況や被災者の現状についてしっかりした情報をもっていない。福島出身として、日本人として恥ずかしくないように、震災をはじめとする日本の問題について知識をつけたいと思いました。

差別について

●授業で日本人の人種差別の現状を目の当たりにした際は、日本人として恥ずかしさ、また怒りを感じた。今までは日本の差別について知ってはいても、解決に向けて真剣に考えたことがなかったが、この授業のお蔭で、日本人として差別にどう向き合って、なくしていくかを深く考える機会を得られた。

留学生のレポートより

LGBTについて

- なぜ、日本人はLGBTや同性婚を支持すると言っておきながら「当事者だったら？」という議論の時は急に支持しなくなるのだろうか。
- 自分が想像していた日本人は保守的でLGBTに対してもいいイメージをもっていない、否定的な人たち。だけど、グループの日本人はとてもオープンで教科書で習った日本とは違う。自分の考え方を改める機会になった。今の日本を理解したいという目標をある程度達成できた。

女性の社会進出について

- 韓・日・中の中で女性の社会進出は、日本が1位、次に韓国、中国だと思っていたが、中国、韓国、日本だったので驚きました。

働き方・求職活動について

- 大学で専門教育を受けるのに、日本では就職活動の時に専門性があまり問われない。北欧とは違うので、最初はとても違和感があったが、入社後の社内研修のシステムを知って大変驚いた。そしてうらやましくも感じた。

日本における国際共修の課題

1. 理論構築の必要性

- ① 発展経緯や目的等が異なるため統一した理論背景が共有出来ていない
- ② 「職人芸」として発展しつつある
- ③ 全ての学生を対象とした、プログラム、学科、学部、大学、国レベルでの理論に基づいたカリキュラム改革が必要

日本における国際共修の課題

2. 学習成果：ラーニングアウトカム

“Learning outcome assessment is at the heart of education.” (Deardorff, 2015)

- ① 学習目標だけでなく「成果」を意識する
- ② 卒業時までには修得する能力、資質、姿勢とリンクさせる
- ③ 学生にとって理解しやすい形で明示する

“...realistic, specific, measurable and written in terms that students understand” (Leask, 2015)

例えば:ラーニングアウトカム = 学士力

- 学士課程の各専攻分野を通じて培う力。
- 教養を身につけた市民として行動できる能力。

知識・理解

汎用的技能

(1) コミュニケーション・スキル

(2) 数量的スキル (3) 情報リテラシー

(4) 論理的思考力 (5) 問題解決力

態度・志向性

(1) 自己管理能力 (2) チームワーク、リーダーシップ

(3) 倫理観 (4) 市民としての社会的責任 (5) 生涯学習力

統合的な学習経験と創造的思考力

例えば：ラーニングアウトカム＝社会人基礎力

□ 組織や地域社会で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な
基礎的な能力

□ **3**つの能力・**12**の能力要素

① **前に踏み出す力**（アクション）

主体性／働きかけ力／実行力

② **考え抜く力**（シンキング）

課題発見力／計画力／創造力

③ **チームで働く力**（チームワーク）

発信力／傾聴力／柔軟性／状況把握力／
規律性／ストレスコントロール力

政策・施策



大学



学部・学科



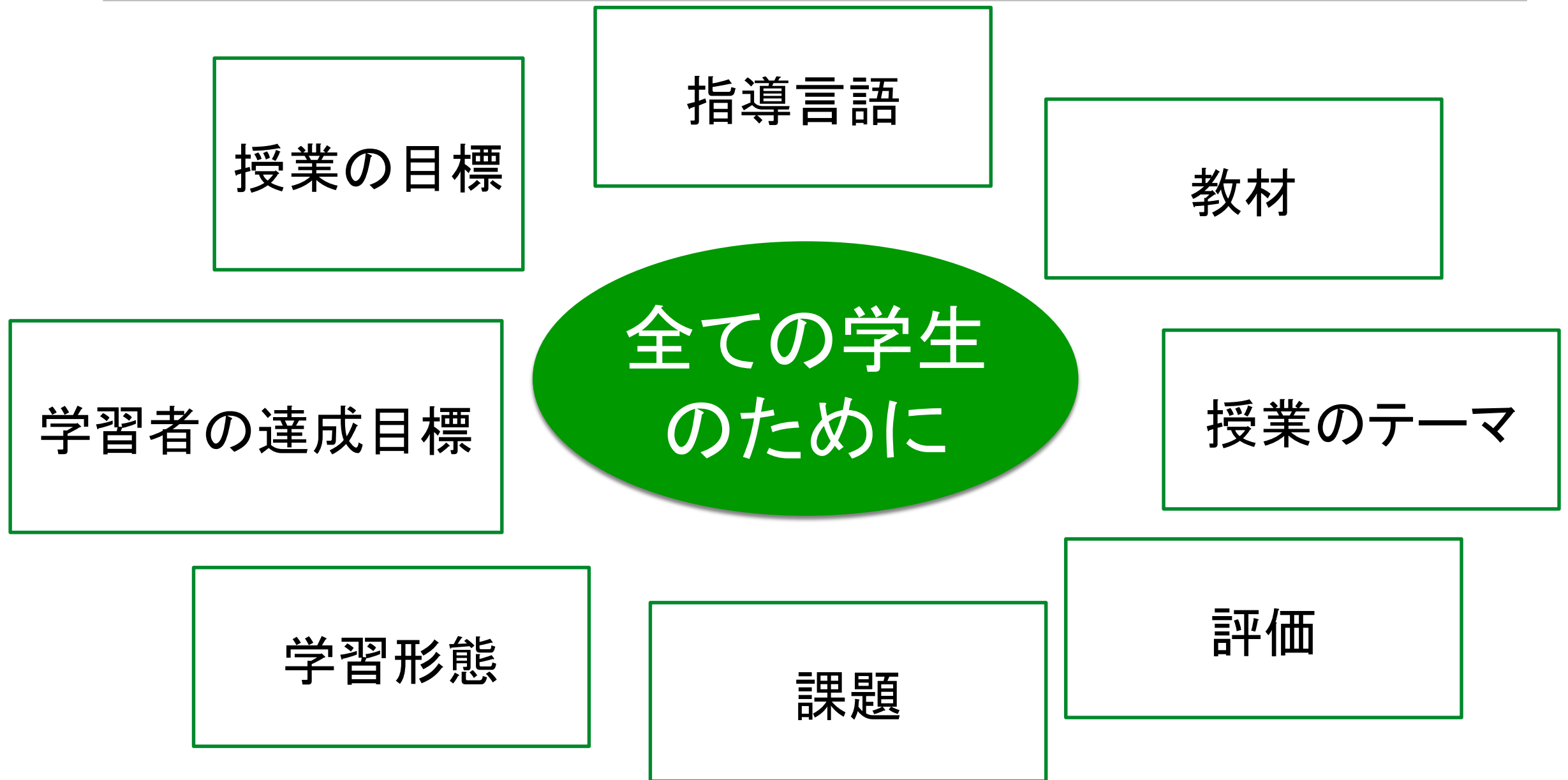
プログラム



授業

日本における国際共修の課題

3. 教授法の確立



学習成果のアセスメント

1. 学習成果とアセスメント授業やカリキュラム設計の肝となる

“Clearly stated learning objectives determine the evidence you need to collect, which in turn determines which tests, tools, or measures you should use” (Deardorff, 2015)

2. アセスメントは「改善」と連動させる

“powerful instrument for improvement” (Walvoord, 2004)

3. 評価対象者にアセスメントの目的・意義を伝える

4. 教員の多くはアセスメントの訓練を受けていない (Hutchings, Kinzie & Kuh, 2015)

学習成果アセスメントにおける留意点

1. 授業の目的、学習者の到達目標、教材、課題、授業での教員による介入と連動していること
2. 学生の学びの「測定」を目的としていること
3. 複眼的な視点で、継続して学生の学び・成長を測ること
4. 何を（What）、どのように（How）だけでなく、なぜ（Why）評価するのかを学生に分かり分かり易く伝えること
5. 建設的なフィードバックを含んでいること
6. 学生の学びの質を高めることを目的としていること（メタ認知）
7. ティーチングの質を高めることを目的としていること

まずはアセスメントを自己評価

評価

プレゼンテーション2回（グループ）

- 授業の目的に沿った評価項目を学生に伝え、それに従い評価
- ピア・評価を取り入れているが、成績への反映はなし
- 教員評価、ピア評価をもとに、グループで自己評価をして、そのまとめを受講者全員にフィードバック

レポート3回（個人）

- 授業の目的とは別に、学習者独自の目標を設定させ、レポートでは達成度の振り返り
- フィードバック（留学生の場合は文法の添削。誤字は○で囲むだけ）し返却

★アナログ・ポートフォリオの導入

なぜ？という
視点が欠け
ている

メタ認知へ
の働きかけ
が弱い？

日本での国際共修における課題

1. 理論構築と実践の普及
2. 教授法の開発
3. グッドプラクティスの共有（
専門開発・教員研修

全ての学生
のために

参考文献

Deardorff, D.K. (2015) Demystifying Outcomes Assessment for International Educators : Practical Approach. Stylus Publishing.

Hutchings, P., Kinzie, J., & Kuh, G.D., (2015) Evidence of Student Learning, In Kuh, Ikenberry, Jankowski, Cain, Ewell, Hutchings and Kinzie (Eds.) Using Evidence of Student Learning to Improve Higher Education: San Francisco , CA: Jossey-Bass.

Leask, B. (2015) Internationalizing the Curriculum. London: Routledge.

Walvoord, B.E.(2004) Assessment Clear and simple: A practical guide for institutions, departments, and general education. San Francisco: Jossey-Bass.

お勧め

Ryan, J.(2013) Using Cross-Cultural Teaching and Learning for Home and International Students